

4. 今後の課題

(1) 組み立てに対するスキルの共有

本技術については、平成 23 年から現地実証ほ等を通じ、現場での P R を進めておりますが、大豆小畦立て播種機に比べ、組み立てに要するパーツや工程数が多いことなどから、今後の普及拡大には、パーツの製造・組み立てを請負う業者の育成など、農家がスムーズに取り組めるようフォローする体制を整備するとともに、実証ほや先行取り組み地区を拠点と位置づけて、普及していくことがカギになると思われます。

本マニュアルでは、誰でもすぐに取り組んでいただけるよう、組み立ての部分に紙面を割きましたが、今後、県内農機販売店・J A 農機センター、生産組織のオペレータ等を対象に、セミナー等を通じて組み立てに関するスキルの共有を図りながら、各地域で普及の拠点となる成功事例の積み上げを推し進めていきます。

(2) ほ場適応性の判断

麦類の湿害軽減播種技術については、大豆のそれに比べ、選択肢がきわめて少ない現状にあることから、今後本技術が有効に活用されることが期待されます。

一方、本技術の普及は端緒についたところで事例がまだまだ少なく、特にほ場条件（土質・土性）による適応性の差異については多様な事例の蓄積を要することから、今後、現地実証のデータや生産者の意見等をフィードバックさせるとともに、他の湿害軽減播種技術（耕うん同時畝立て播種等）との比較等も行いながら、本技術の適応条件の整理・技術の改良等を進めていく必要があります。

(3) 各種ハローへの対応

今回の密条用小畦立て播種機の開発では、作業幅 240cm の代かきハローを用いましたが、大豆の場合と同様、現場では様々なサイズのハローがあることから、機種に応じた爪配列のアレンジ（畦間・条数・条間の割振り）等について、事例を蓄積しながら整理していく必要があります。

(4) 技術の体系化

密条用小畦立て播種栽培については、条間を寄せることにより、生育期の中耕や土入れが可能になることから、今後これら中間管理の効果についても、検証を進めていきます。